

地方の城下町名古屋が

何故六大都市になりえたのか

8月17日と31日の2回にわたり、見出しの内容について高木庸太郎氏の講義を受講しました。あまり気にもしなかったのですが、名古屋の歴史を考える時このことは確かに興味を引くテーマです。以下先生のお話といただいた資料を基に、あらためて私なりにまとめてみました。

1 大都市は幕末に全国から人と物が集まる「都」であった

東京、大阪をはじめ今の大都市は、いずれも幕末のころから大きく発展する下地があったという。つまり、東京(江戸)は政治の都であり、全国の大名が集まっており大名屋敷を構えていた。そのため大きな消費が生まれた。大阪は商業の都、全国の大名の蔵屋敷があり米をはじめさまざまな物産はここから各地に送られた。京都は精神と文化と技の都で、朝廷・公家と寺の本山があった。横浜・神戸は貿易の都で、開国後に外国人や貿易商人が集まった。

しかし、その中で名古屋だけは例外で尾張藩はもともと清州に城をかまえていたが、この地は中山道から外れているし、東海道からも外れている。後に名古屋へ移るが名古屋とて同じ条件であることに変わりはない。ではなぜ人口7~8万人の地方の城下町から出発して、他の大都市と肩を並べるようになったのか?とても興味深い点であり、名古屋の歴史を考える場合の出発点と言えよう。

◎江戸時代の主な城下町

和歌山・水戸..... 御三家
仙台(伊達)・米沢(上杉)・会津(松平)
福井(松平)・金沢(前田)
広島(池田)・広島(浅野)・土佐(山内)
熊本(細川)・鹿児島(薩摩)

◎昭和 10 年の 6 大都市

東京.....	587 万人	572 平方キロ
大阪.....	299 万人	185 平方キロ
名古屋.....	108 万人	158 平方キロ
京都.....	108 万人	288 平方キロ
神戸.....	91 万人	82 平方キロ
横浜.....	70 万人	186 平方キロ

◎昭和 10 年の他の都市

和歌山...18 万人	金沢..... 17 万人
水戸.... 6 万人	岡山..... 16 万人
仙台..... 22 万人	広島..... 31 万人
会津.....5 万人	熊本..... 19 万人
福井..... 7 万人	鹿児島... 18 万人

※戦前にも 6 大都市という言葉はあった、これが「特別市制」となりその後「政令都市」に変わった。

※政令指定都市とは…1956 年(昭和 31 年)に施行されました、地方分権の推進を目的としたもの。大都市行政の合理的、効率的な運営と市民福祉の増進を図るために、一般の市とは異なる特例を定めた。人口 50 万人以上としたが、当初は 100 万人以上または近い将来越える見込み、という基準だった。それが、2001 年基準が緩やかになり、現在は 70 万人以上程度に緩和された。それにより静岡、堺、浜松、新潟、岡山が政令指定都市となった。

現在は札幌、仙台、さいたま、千葉、川崎、横浜、相模原、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、北九州、福岡の 19 都市。

政令指定都市になると保険・福祉・教育・都市計画・土木など県から事務委譲があり、且各種材源の委譲が行われ、市による主体的な財政運営が可能となる。

2 名古屋が大都市に発展して行く流れ

名古屋が大都市に発展した理由はいくつかあげられるが、木曾三川の船運と伊勢湾・三河湾の海上交通を活かして地場産業を発展させたことがその基にあると言う。時代を追って産業がどのように発展したか整理してみるとそ

の過程が明らかになる。

①名古屋の支配体制は江戸期から継続し変わらなかった

東北は列藩同盟で戊辰戦争のとき明治政府に対抗した、そのため明治以降は政治的に警戒され再編された。例えば会津や弘前は県都にはならなかった。水戸では徳川斉昭の死後藩が分裂した、熊本は洋学派と保守派が対立した、紀州は幕府老中勢力の中心的存在だった。そんな中で、尾張藩は早くに徳川慶勝が幕府に反論を統一し、江戸期からの政治経済のまとまりを維持した。

②恵まれた地理的条件

名古屋は江戸と京・大阪の間に位置しており、江戸中後期から江戸と大坂の市場を結んで経済が発展した。その基礎となったのがその一として背後には濃尾平野が広がり、発展の余地が大きかったといえる。紀州和歌山は広い平野がない、尾張藩は美濃・岐阜の最大の領主でありこの広い地域の産業を、木曾三川とさらに矢作川、豊川流域を伊勢湾と三河湾で結ぶことで人と物の流通を盛んにした。

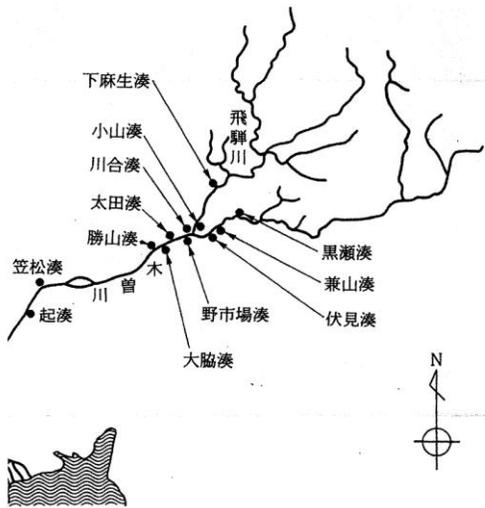


図-4.1.3.1 かつての木曾川・飛騨川筋の主な川湊

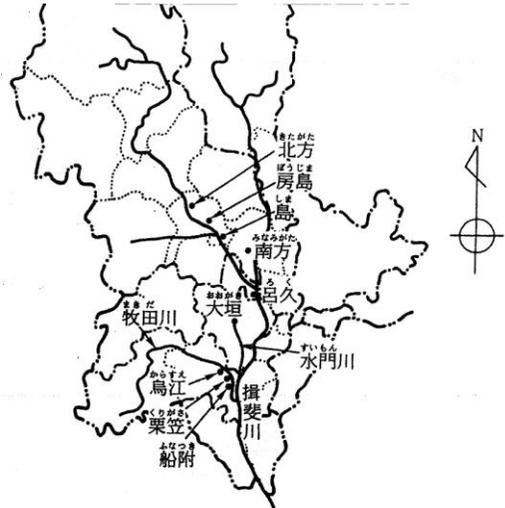


図-4.1.3.15 揖斐川の水運の拠点

その二は交通網の整備であり、その一つが海上交通網で伊勢湾・三河湾の湊と船運。名古屋港築港の重要性があげられる。さらに鉄道網の中間点であった、東海道線・中央線・関西線が各地と結んでいた。

③尾張徳川家の創出と名古屋築城

慶長12年(1607)徳川家康は、九男義直を清州城に入れる。これが尾張藩の始まりで同15年名古屋城を築城。これにより名古屋は尾張の中心となり、このことが大都市名古屋圏の起点となった。

つまり、この清州越により名古屋が尾張の中心になり、尾張が東海地域(伊勢湾岸地域)の経済の中核的位置を占める起点となった。さらに、慶長11年(1607)室町期には三河守護支配下にあった知多郡を加増し、慶長17年には美濃の領地を加増。元和1年(1615)木曾山及び木曾三川流域の要所を尾張藩領に。そして、岐阜町を尾張藩支配にして岐阜奉行をおいた。この時尾張藩は、尾張に48万石美濃に12万石を有した。

④木曾川の川湊と交通

鉄道以前の物資の主な輸送は川であり、木曾の木材は川をつかって流し、ある程度まとめて筏に組んで下流に運んだ。その木材の集積場の一つを訪ねたことがある、杉原地畝の記念館を訪ねて丸山ダムから蘇水峡を歩いたが、ダムから少しの場所に「錦織網場跡」というのがあった。説明板とともにこの歴史を見続けてきたであろう天然記念物の大きな「くろがねもち」の木がそびえていた。



錦織網場跡の説明板と付近の木曾川の流れ

このように物資の輸送は川であり、木曾三川が尾張藩領の地域の産業を城下と結んだのである。しかし、川を使った輸送はその後ダムができると鉄道に変わっていった。

3 名古屋圏形成の起点となったのは

名古屋築城以来の二百数十年の尾張藩支配は、藩を枠としつつも、独自の下からの地域社会を形成し、それが広域的な伊勢湾・三河湾地域の中で支配的な位置を占めた。

①江戸期の地域形成 --- 宗春・宗睦の施策

藩主の地域から住民の地域への転換、農山村の地域形成と進み町を含んだ商品流通が盛んとなる。このことにより名古屋圏の基盤が形成されていった。尾張藩の地域経済発展を見てみると-----

★17世紀は尾張藩政の確立期

★元禄～享保期(18世紀前半)は消費経済と名古屋城下の発展・・・7代藩主宗春が将軍に背いて華やかな施策を展開した。

宗春は藩主に就任すると、自身の著書「温知政要」を藩士に配布、その中で「行きすぎた儉約はかえって庶民を苦しめる結果になる」「規制を増やしても違反者を増やすのみ」などの主張を掲げ、名古屋城下に芝居小屋や遊郭を誘致するなど解放政策をとった。これらの政策には御三家筆頭でありながら、兄継友が将軍位を紀州家の吉宗に奪われたことや、質素儉約を基本とする吉宗の享保の改革による緊縮政策が経済の停滞を生んでいたことへの反発があると言われている。吉宗の儉約経済政策に自由経済政策理論を持って立ち向かったのは、江戸時代の藩主では宗春だけである。

★宝暦～天明期(18世紀後半)飢饉・赤字財政・一揆

★地域振興・重商主義政策への転換・・・9代藩主宗睦の天明・寛政の改革

宗睦は樋口好古らを登用して藩政改革に乗り出し、新田開発や殖産興業政策、治水工事(熱田での開墾)の多くで成功を収めている。問題化していた役人の不正を防止するため、代官制度の整備も行っている。農村の支配強化も行い、徴税の確実性に務めている、藩士に対しては相続制度を確実なものとした。文化的にも基礎が築かれていた藩校・明倫堂(現在の明和高校)を創設して藩の教育普及に努めた。

これまでは米作りが中心だったのが、地域の物作りが盛んになり発展する。

②治水事業と地方へ所付け代官所の設置

宝暦～天明の江戸中後期には洪水が頻発した、宗睦は今日に残る治水対策を行っている。さらに、天明の時代には水野千之右衛門が洗堰の普請、新川



分流、日光川の付け替えなど代表的な工事が行われた。

天明の改革では、尾張と美濃の尾張藩領内に所付け代官所を10か所（左図の名古屋、鳴海、横須賀、佐屋、清州、小牧、水野、北方、大田、上有知）設置し、地域からの請願特に洪水後の訴願激発状況に対応した。このように地域に訴願を分散し地域振興政策とした。これにより地域の有力者と結ぶことができ、代表的な地場産業として鳴海絞、知立の馬市、瀬戸焼きなどが栄えた。また、尾張

名所図会には内海のイワシ漁などが載っている、イワシは木綿をつくる綿の木の肥料として使われた。

③伊勢湾・三河湾湾岸地域の発展

三河と知多半島の西海岸の海は浅く、大きな船の出入りに適していなかった。それに対し知多半島の東側の海は深かったので船運が盛んになり、大消費地の江戸に向けて江戸廻船、つまり定期便が行きかうようになる。はじめは米・酒・木綿・瓦が主要な産品だった。それと言うのも、幕府・旗本・譜代大名領地が多いことから年貢米の輸送需要が大きかった。木綿は三河・知多半島は全国的にも産地だったし、瓦は三河の特産だった。そのため三河から発送する時には、まず小舟に載せて知多半島側の湊で載せ替えていたという。しかし、江戸中後期には三河・知多半島は酢・みりん・みそなどの味の産業が発展し、米や木綿に取って代わることになる。

4 100万都市名古屋の成り立ち

これまでの武士の経済は米作りを守るだけであって、経済は発展しない。産業が発展したことで名古屋は100万都市になった、そもそも誰がどんな産業を興し、発展させたのか!! 名古屋産業の近代化を担った人々とその過程を見てみると.....

①名古屋城下商人の活躍

最初にあげられるのが何と言っても伊藤次郎左衛門。呉服商から身を起こした伊藤家は、京都からはいってくる物品を一手に引き受けていた。代々次郎左衛門を名乗ったが、家系図を見ると名前はすべての人に「祐」の字がつかわれて「すけ」と読んだ。初代は祐道、二代目は祐基、三代目は祐蔵-----。天明元年3月に店舗は焼失し、寛政元年(1789)に再建された。店開きにあたり近隣の町や村に今でいうビラを配っているがその数がすごい。城下に21,270枚、知多郡に1,035枚、岡崎に2,450枚など計36,000枚が配られた。当時は店に来る客相手だけではなく、今でいう外商に力を入れていた。地区担当者が庄屋宅などに寝泊まりして、地区の有力者をみかたにして地域に売り込みを図ったという。

次に金物販売では岡谷惣助、材木商であり後には鉄道の枕木など鉄道関連まで手掛けた鈴木惣兵衛。そして、彼が中心となり財界が出資して設立したのが「日本車両株式会社」で、豊富な木材を使って車両生産まで手掛けたのである。

②近郊の豪農・多地域出身者の活躍

繊維産業では滝兵・滝定の近藤友衛門、明治銀行頭取を務めた神野金之助は植林事業を行うが、後に鉄道の拡充に努め名古屋電気鉄道の社長となる。肥料の分野では関戸守彦・高松定一らが活躍した。

そして、他地域の出身者では名古屋商工会議所専務の上遠野富之助、名古屋に定住しご意見番と言われた、三井銀行名古屋支店長の矢田蹟。さらに、電力開発に尽力した福沢諭吉の娘婿である福沢桃助。桃助の片腕と言われ大同製鋼所を創設した下出民義、織物機械の発明王豊田佐助がいる。

③政治家の果たした役割

産業界の動きに対して政治家はどのような取り組みをしたのか---

★安場保和---彼は熊本県に生まれ藩校時習館に入る、後に岩倉使節団に加わる。明治8年41歳で愛知県令に、地租改正、行政区画の改正、県庁庁舎の新築、明治用水の開墾、農工漁業の改良、水害除去、名古屋～熱田間の掘割開削などに力を尽くし、名古屋城の金シャチを復旧させた。

★吉田禄在---名古屋区長を務めた禄在は旧尾張藩士下級武士に生まれ、鉄道では笹島に名護屋駅を造り、海では名古屋港築港を実現させた。

★加藤重三郎---市長を務めた彼は明治43年(1910)関西共進会の開催や上下水道の整備、イギリスの外債を使って新堀川の開削を行った。

★桂太郎---外債借入れの仲立ちをした、名古屋とのかかわりは明治24年に第三師団長として、濃尾地震の時に政府命令なしで地域救済活動を行った。

★坂本市長以降には---生活必需品の安価な提供のため公設市場の開設、電車の低料金確保のため市営電車を走らせる、無料宿泊所の設置、市区改正事業(都市計画)の開始はライフラインを都市が運営するようになった。

④自前で成し遂げた近代産業の育成

名古屋の近代産業育成の大きな特徴は、政府に頼らずに地元の力を結集して成し得たことだ。名古屋の経済界をリードした名古屋商工会議所の初代会頭は伊藤次郎左衛門が4年務めるが、その後明治26年～大正2年の20年間にわたり務めたのが尾張藩武士だった6代会頭の奥田正香だ。彼は政府の勸業資金の活用だけではなく、尾張藩武士の出であることを背景に全国情報と尾張藩社会の力の結合役であった。つまり、経歴と力を背景に名古屋の産業育成に多大の功績を残した。それぞれの産業の近代化を見てみると-----

☆繊維産業---工場の機械化と綿から羊毛へ

☆陶磁器-----国内用品から輸出陶磁器へ。はじめは木箱に梱包していたが、ダンボールになり「浅野ダンボール」が誕生。

☆木材工業の勃興---木曾木材の伝統、大須の仏壇・家具からバイオリン、マッチ、時計産業のメッカとなる。そして、木材を使用した鉄道車両の生産(日本車両)まで手掛ける。

☆エネルギー産業---福沢桃助は水力発電所の建設を進める、これにより電力が余るようになると、下出民義は電力をたくさん必要とする製鋼所「大同

製鋼」を設立する。このように電力開発に成功したことで名古屋の産業は大きく発展した。

5 モダン都市へ伊藤次郎左衛門と伊藤裕民の貢献

第一次世界大戦(大正 3~8 年)後に経済は飛躍的に発展した。これはヨーロッパが戦場となり、日米が漁夫の利を得たものだ。したがって名古屋のみならず日本全体が活況を呈した。名古屋では産業が飛躍的に発展し、中でも機械・化学工業の成長、輸出の中心は陶磁器と繊維製品で、南北アメリカとアジアが得意先だった。横浜からアメリカへ神戸からはアジアへ船積みし、アメリカ向けにはディナーセットをノリタケ・名古屋製陶が、アジア向けには生活雑貨を中小業者がになった。

そんな中で新しい食品産業が生まれた、ドイツ人捕虜が教えて広まったパン、ビール、ケチャップだ。製造したのがシキシマパン、カブトビール、カゴメケチャップ。

①名古屋の都市計画と基盤整備

大正 10 年隣接する 16 ヶ町村合併、工業重視の土地用途の設定、耕地整理・土地区画整理方式による都市計画の成功があげられる。都市計画が成功したのは全国的にもまれであった、特徴としてあげられるのが土地は余っていたので軍需工場が進出した。

②伊藤裕民と名古屋の国際化

昭和 2 年~8 年に名古屋商工会議所の会頭を務めた伊藤裕民は、第一次世界大戦後の名古屋の飛躍、国際化と地位向上に貢献した。特に城下町北部の大手門前と、本町通りの交差する城下町の顔のモダン都市化を進めた。伊藤銀行、サカエヤ、八重垣劇場、仲店、銀行集会所がそうだ。

③伊藤次郎左衛門のモダン都市名古屋への貢献

15 代伊藤次郎左衛門祐民が今のようなデパートを設立した、他には名古屋駅の建て替え、市公会堂建築費用の 1 割負担するなど中心になって進められた。そして、外国人の宿泊するホテルがなかったので名古屋観光ホテルの

建設、さらにはゴルフ場の開設、ロータリー倶楽部を立ち上げている。

6 100万都市となった名古屋

昭和2年～13年の間市長を務めたのが大岩勇夫、彼は市義会議長から市長となり、ついに100万都市名古屋を実現した。

①名古屋汎太平洋平和博覧会の成功

昭和12年(1937)不況下での博覧会は、平和時最後で全国的にも最大のイベントで480万人が押し寄せた。これに合わせて名古屋駅と東山動植物園が開業した。この時のうたい文句が「東洋一の〇〇〇」であった。

世界の繁栄・進化と協力・平和・福祉をテーマに博覧会の参加国は29カ国、アジアと南北アメリカ、オーストラリア。これにより名古屋は東京、大阪、京都に並んだといわれる。このころ名古屋デトロイト構想なるものがあり、愛知時計、大隈が一緒になって自動車を造るが産業化には失敗する。その後トヨタ自動車が生産される。

②名古屋大学の誘致

100万都市として国に総合大学の必要性を訴えてきたが、「平和」の言葉に反感をもつ軍部の軋轢もあって、平和博覧会に陸軍の公式訪問はなかった。そんな軍部は平和博覧会以後、軍需産業の中心地にする計画のもと、工学部しか認めなかった。初代総長には渋沢元治(東大工学部長)を任命し、名古屋の重工業化の促進を図った。

7 現在の都市人口

平成23年9月1日現在 名古屋の人口 2,266,830人

政令都市の2011年推計人口(万人)

東京.....897	札幌...190	川崎.....143
横浜.....369	神戸...154	さいたま..123
大阪.....267	京都...147	広島.....117
名古屋..226	福岡...147	仙台.....105